

日中言語における鏡像語研究

-中国語を母語とする日本語学習者を中心に-

(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D171478

氏名：田 豊

現代日本語には「出演－演出」、「出産－産出」のように字順が逆転する二字漢語が存在している。このように字順が相反する二字漢語は、日本側の研究者に「鏡像語」、「反転語」と呼ばれている。中国語にも「出演－演出」、「出産－産出」という鏡像関係にある語彙が存在している。中国側ではこれらの語彙を「同素逆序詞」と呼ぶ。上記の例では、日本語と中国語の語彙間にも「産出－出産」、「出産－産出」のような他言語に鏡像語がある語彙が存在していることが分かる。

従来の日本語の漢字や漢字語教育研究の中では、漢字圏に属する中国の学習者は中国語の知識に頼り推測することができる点で、非漢字圏の学習者に比べて、有利であると同時に、多くの問題を抱えているということが知られている。

意味・用法の不正確な知識は日本語習得の障害となりうる。例えば、「紹介」という単語を使って作文を書く際、「友達を母に「紹介」する」という文章を作ることがある。こうした字順を誤って使用することは、決して初心者だけでなく、多くの中級以上の学習者にも多く見られる。

日中漢字語には「用意－用意」のような同形語が多数存在するため、学習者は漢字語の対応づけをして学習することが一般的であり、その過程で鏡像語を同形語と誤用する現象が生じる。同形語であれ鏡像語であれ、語義の関係には変化があり、その規則は複雑でバリエーションが多く、語彙の理解には個人差がある。学習者が直面している課題の一つであるといえよう。

日本国内にも、海外にも、日本語学習者のうちに、中国人学習者は30%を超えており、日本語教育研究にとって極めて重要な研究対象といえる。

これまで、多くの日本語における第二言語習得に関する研究の中で、日中鏡像語の習得に関する研究の割合は低く、現時点ではあまり注目されていない分野であるといえる。しかし、実用場面と教育現場を見ると、日本語能力の高い学者においてさえも、日中鏡像語を使用した場合には数多くの誤用が生じていることが伺える。日中鏡像語の使用は日本語を使いこなす上での障害の一部となっている。そのため、日中鏡像語の習得についての検討が必要であると考えられる。

特定の母語話者、特に中国語話者を対象とする語彙学習・語彙研究も上述の

考え方と共通するところがあり、母語知識を利用して効率よく漢字語の学習を実現するためには、彼らの立場で考える日中対照研究と習得研究を行う必要があるのではないかとと思われる。

以上の原因を踏まえ、次の三点を研究の目的とする。

第1に、既存の日中鏡像語分類の枠組みによって、これまで議論されてこなかった観点を加え、日中鏡像語の語彙的特徴を検討し、それぞれの言語的特徴がどのように日中鏡像語の受容に影響するのかを考察する。

第2に、フォローインタビューにより、次の4点について検討する：1. 日本語の習熟度；2. 学習者の知識レベル；3. ストラテジー；4. 語の習得難易度。

第3に、上述した2つ研究方法のデータを分析した結果を参考にし、日中鏡像語に対して日本語教育場面へアドバイスを提言する。

序章の第1—3節においては、本研究のきっかけと背景、本研究の目的、本研究で扱う用語の定義、本研究における全体の構成、及び流れについて述べた。

序章の4節は先行研究で、まず、従来の研究に基づき、日中鏡像語の定義と分類方法をまとめた後、従来の第二言語習得に関する対照分析、誤用分析、実証研究を概観した。

その結果、従来の漢字語習得に関する研究では、質問紙の手法で使用し、大きく分けて、穴埋め、選択肢と正誤判断の3つのやり方に大別される。この3つの調査方法には1つの共通する欠点がある。すなわち、学習者が問われる対象語の知識を持っているか否かについては、十分に調査できないということである。先行研究の問題点により、客観的なデータだけでなく、学習者の主観的な思考や学習者の思考過程を分析することも重要であるという示唆を得た。

序章の5節では、本研究の試みを述べた。CLJにおける日中鏡像語の習得を考察するには産出と受容といった面から考察する必要があり、その過程に影響された要因と使用したストラテジーを翻訳、意味解釈、選択肢という3つの質問紙調査とその後に行われるフォローインタビューで考察する。

第一章では、まずCLJの日中鏡像語の産出について考察することにより、次の結果がまとめられる。語彙の習熟度が鏡像語の使用を左右する根本的な要素である。習熟度が高い限り、他の要素に左右されず、両言語の語彙を照合する

形で対応する語彙を産出することが出来るといえる。習熟度が低くなるにつれ、学習者は語彙の使用を正しく把握することができなくなり、「表現選択」と「中国語代入」というストラテジーを使用するようになり、正用か否かが保証できない。結果データを分析すると、被調査者の中には、JFL 対象が第二言語習得する際には、語彙知識や語義理解などが JSL 対象より優れていることが分かった。無習熟の場合でも、JSL が自らの言語知識で産出過程の正確度を判断する過程が見える。語彙特徴は日中鏡像語の産出過程において正の干渉があるが負の干渉もある。語彙の習得度は JSL の方が一般的に高く、語彙特徴は JSL にとって産出の正しさを判断する根拠となる場合が多いため、結果としては正の干渉となってくる。一方データ分析とインタビュー内容を含めて考察すれば、語彙習得度の低い JFL 対象には語彙特徴は負の干渉である場合が多いことが分かった。

第二章では、CLJ の日中鏡像語の受容について考察することにより、次の結果を得た。

CLJ が日本語語彙を解釈する際に使用したストラテジーのには、「直接対応」、「言語知識」、「文脈連想」「中国語義対応」の 4 種がある。その中で、「直接対応」と調査 1 での「直接対応」、「中国語代入」の規則はほぼ同じであり、「言語知識」に属する「文法知識」と「文脈連想」の 2 種は調査 1 では現れず、CLJ は日本語を受容する場面だけに使用するストラテジーであると考えられる。CLJ は中国語の文を日本語に訳す際に使用する翻訳方法に限られ、文脈を参考にすることが出来ないとも考えられる。

影響要素の面では、「習熟度」、「意味関係」、「表現形式」、「品詞」の 4 つがありすべて調査 1 の結果と一致する。よって、語彙特徴は CLJ の産出場面においても、受容場面においても、大きな影響を及ぼすと考えられる。

第三章では、CJL の日中鏡像語の適用能力を選択詞問題により考察し、調査 1 と調査 3 の結果を比較することにより、CJL がどのような日中鏡像語に対して母語の干渉を受けて誤用しやすいかを考察した。

その結果、習熟度は依然として正用率の決定要因であることが明らかとなった。目標語彙が CJL の常用語彙である場合、CJL は日中鏡像語の意味関係や表

現形式などの要素に影響されず正しく使用できる。習熟度が下がるにつれ、JSLのメリットが見えてきた。JSL対象がJFLより複雑なサ変動詞や形容動詞に対する正用率が高く、正用率の低い語彙では、JSLの正用率はJFLよりも高い。

ストラテジーでは、3種のCJLのストラテジー使用状況には、大きな差はなく、多くの場合、CJLは習熟度に基づいて判断する傾向が強い。未習熟の語彙に直面する際に、JSLは言語知識に関する手がかりを通じて判断することをより好む一方、JFLは中国語と対照する方法をより好むことが分かった。

第四章では、第一から第三章までの分析と考察した結果から、日中鏡像語は「表現形式」、「語義関係」、「品詞関係」の三つに分類された。「表現形式」が簡単で、暗記記憶によって区別できることのほかに、「語義関係」と「品詞関係」には、より詳細に区別できることで、日中鏡像語の対応付けが非常に複雑であることが分かる。では、中国人学生に日本語を教授する際、日中鏡像語を効果的に教えるにはどうすればよいのだろうか。あるいは、日本語学習者として、自らが日中鏡像語を習得する際に、母国語の負の干渉をどのようにして、有効的に克服できるのだろうか。本研究は全文のデータ分析した結果を参考にし、語義関係、使用方法、漢字構造の三つの角度から、日中鏡像語に対して授業上の教授と課外の学習という二つの方面からいくつかのアドバイスを提案した。

最後に、終章では、第一章から第四章までで得られた主要な知見をまとめ、本論文を総括し、今後の研究課題を述べた。